

(神戸新聞社提供)

コであった。アンコたちの出身はさまざまであるが、性格的にいえば、社会的な変革のないかぎりアンコであつてアンコ以外の何者にもなれないという本物のアンコと、なんらかの形で前職または前出身地とつながりをもつアンコに大別される。年齢的にみれば前者は年輩者に多く、後者は若い。おなじ脱出の希望にせよ、希望の大きさがちがうのである。しかしいずれにせよ、アンコの世界から脱出したいとい

うであった。神戸港に働く日雇沖仲仕は、ふつうアンコとよばれている。これが横浜港にくると風太郎になり、東京ではムク鳥または立ちん坊、さらに北海道にくるとゴモとなり、植民地香港では苦力（クーリー）となる。ところによつて呼称がちがうあたり魚類と酷似している。神戸や大阪でアンコとよばれるのは、関西人のアリアリズムのためである。深海に棲息するアンコウは、つねに口

深海に棲息する者たち



波止場に働く

義理人情の社会をいとい神戸の底辺に落ちこんできた港の日雇沖仲仕たち、この社会にもまた変動の波がやつてきた

森秀人

を開いてえものを持ち、どんなものでも貪欲に食べる。

神戸港の歴史をひもとくまでもなく、神戸という近代都市は、四国・九州・近畿諸県の出身者によってできあがつてゐる。『兵庫県労働運動史』によれば、明治の開港と同時に諸県の貧民がむらがりより港はスラムの巷となつたとある。神戸の地理的条件にもよるが、それは、今日、失業した者、喰いつめた者、家出した者、破産した者、犯罪を犯した者などが一度は立ち寄る宿場ともなつた。

中突堤のちかくで、なんとなく立つてゐる

うながいは大きい。なにがかれらを、脱出への希望にかり立てるのであらうか。

その大きな原因は、アンコに家庭がないことだ。ごく少数の例外をのぞけば、アンコは特定の家や家族を持たない。流れ者であろうとなかろうと、神戸に来てアンコにならうといふほどの男たちは、すでにこの世のどたん場に生きている。世間一般とのつながりがまったくなくなつてゐる。あるいは自分から断絶している。くわえて金がない。だから神戸の百数十軒の宿はつねに満員であり、公共施設である港湾寮は四百名の定員に欠ける日とてない。残りの者はガード下のスラムや仲間たちと共に借間をネグラとしている。それでもアブレた者は夏期には数百名が野宿をしている。七月、八月の三の宮駅前広場は、絶好の無料宿泊

所となつてゐることは神戸の市民にはよく知られている。

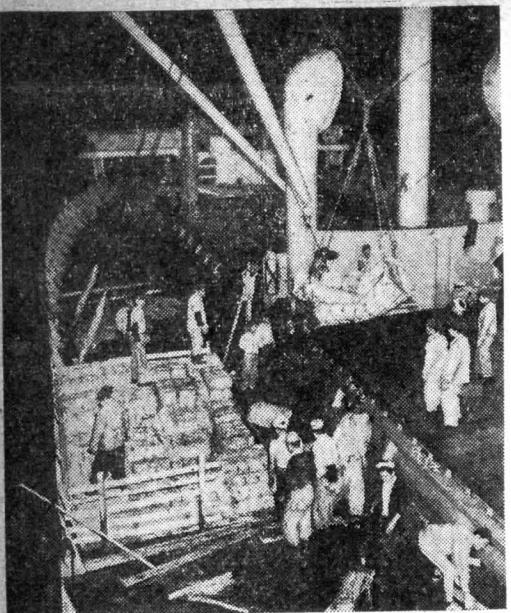
わたしはたずねた元町の三十円宿は、東京山谷のいちばん低級なドヤよりもすさまじいもので、臭氣といい狭さといい、言語に絶した生活環境であつた。ノミやシラミは日本のどこのドヤにも生存している寄生虫だが、柱や壁に黒いシミとなつて残る血痕の数かずはそうたびたびは見られるものではない。ケンカ立まわりは日常茶飯事であつて、わたしも數回にわたり現場を目撃したが、沖仲仕の共通の用具である手鉤をふりまわし、頭や顔や胸から血沫がはねるありさまは、気の弱い者ならば見てゐるだけで氣絶する場面である。わたしはあるとき、血まみれになつたアンコのあとをつけて歩いた。かれはとある修理中の船をみつけるとその船腹のかけにからだを横たえ、そのままグーグーねむりだしたものである。ソー・タイアードというジャズ曲があるがこのねむるアンコの横顔はいかにもくたびれた、といふ感じであつた。

くたびれた、といえば、どんなアンコの顔もくたびれてゐる。労働に疲れ、遊びにつかれて、生活につかれてゐる。しかも敗残者とい

二十五歳ばかりのアンコにであつた。タグボート（ひき船）のならぶ岸壁に足を投げだしわたしたちは一時間ばかり話しこんでしまつた。かれは岡山県のある砂利運送のダンプカーの運転手であつた。人をひき殺して、あとはきまりの転落のケースであつたが、もう二年も港で働いてゐるという。かれの希望は一日も早くアンコ稼業から足を洗つて元の運転手になることになつた。だがもう一面の感情は、気楽で自由なアンコ稼業にあこがれてもいるのであつた。また貧困地帯からの家出人にもあつたが、かれらもまた中途半端なアフ

う自覚の強い初年兵のアンコはいざ知らず、もはや自分が敗残者であり転落者であるといふ自覚もなくなったアンコたちは、非常に原始人にちかくなっている。もっとも原始人をみたことのないわたしには、あてつぱうでしかいえないのだが、文明の発達していない時代の人間の幸福と不幸は、それなりにわかるつもりである。古参兵アンコたちは、たとえば所有の観念については、わたしたち常人のような意識をもってはいない。どこのドヤでもきいたことだが、金をふくめたいとなるのである。盗まれてグチをいうような愚者はアソコの資格はない。

ためにアンコたちは、もつとも完全な所有、方法として、消費し抜くというアイデアを身につける。徹底的に消費すれば、それは完全な盗難予防であろう。比較的に高給とりのかれらは、新しい作業衣よりも競輪ノミヤに財布をはたく。職安まえの煙草屋はビースがいあらん売れるどエツにいり、これは神戸にいあらんよく知っていることだが、アンコたち



(神戸新聞社提供)

神戸港はいまでは、名実ともに日本一の港である。十三本の巨大な突堤と四十の浮橋が出入りする貨物船を横づけし、毎月八千万ト

のはこりのなかで、これともなし保護色をしたアンコたちの背中の黒さが、わたしを怪奇な世界につれこんだ。高いハッチからのぞくと、数十メートル下の船底でうごめくアンコたちは、つねに落下してくる鉄塊や鉄棒から身を守るために、自然のあたえた保護色を身につけているかのようだ。

神戸港はいまでは、名実ともに日本一の港である。十三本の巨大な突堤と四十の浮橋が出入りする貨物船を横づけし、毎月八千万ト

のまぢかの、弁天浜の職安で、朝の四時頃かと思ひの場所に腰をおろしている。神戸の港で働くアンコたちは今は一万の人を越えるほどに多いのだが、かれらの貧乏といふことひとつとっても、いそですかどうなづけないのである。貧しいといふことは貧しいが、豊かであるといふことは豊かである。かれらの労働はたしかに地獄的様相を呈し、

荷役停滯の対策は政府にまかせて、わたしは自分勝手に神戸港を徘徊した。神戸の埠頭のまぢかの、弁天浜の職安で、朝の四時頃か

見者になつた沖仲仕の包帯の白さが目にしみる。一年間に四人のうち一人が必ず大怪我をしていて、神戸の労働白書が指摘しているところだ。神戸の港を歩けば一目瞭然だが、大小五百にたつする倉庫のむれは、つねに満倉であり、いまではもう絶望的なくらいの滞貨状況を現出している。

荷役停滯の対策は政府にまかせて、わたしは自分勝手に神戸港を徘徊した。神戸の埠頭のまぢかの、弁天浜の職安で、朝の四時頃か

のなかで異性とめぐりあつたのか、暗闇をとおしてなまめかしい悲鳴がきこえてくる。牢獄の壁に黙坐している若いアンコは、わたしなどにはおよびもつかない考へにひたり、わたしはふたたび徘徊をつづける。

アンコ天国

がさいごの四十円でビースを買ひ込むのは日常的なことなのである。アルコール分にしても焼酎よりは二級酒を、そしてしばしばビールを飲む。そうして稼いだ金を費いはたし、もはや申し分のない無一文のからだになるとドヤに帰つてねむり、朝、アンコたちは苦役が待つてゐる埠頭にゐるといつて、

売春禁止法以来、アンコたちにとつては、遊べる女の絶対数が不足して代価が高くなつたと不満が多い。わたしはいくつかの売春宿にも行つたが、あるアンコは、まえにはここで遊んでもまだバチンコ代やチャブ(めし)代が出たが、いまでは全収入をそぞぎこんでもたりないくらいだとこぼしていた。女たちは所得倍増のせいかよく肥え、逞ましいからだを縁台にさらして、身なりのよくないわたしを呼ぼうかどうしようと考えていたらしく。

暗い波止場にハシケがむれている。夜の埠頭を歩くのは、ロマンチックなことであるらしい。猫が一匹、一メートルも跳躍してハシケにとびこんだ。すこしまえ、とおりがかりのウェイトレスがアンコの一人に引きずりこまれたハシケに。原始時代にはそういうことは違法ではなかつたはずである。猫はハシケ

たしは見た。貨物船の鉄板が焼け、人間の皮膚に熱線がなだれこむダンブロ(船艤)の中で、鉄のスクランプととりくんでいる日雇沖仲仕——アンコたちを、もうもうたる鉄ナビ

ンにのほる輸出入貨物(価格にして六百億円をうわまわる)をさばき、東京を日本の心臓とすれば神戸を口に譽えなければならないほどだ。神戸の港を歩けば一目瞭然だが、大小五百にたつする倉庫のむれは、つねに満倉であり、いまではもう絶望的なくらいの滞貨状況を現出している。

仕事の危険性についても「あぶないとか、怖いとか考えたらきりがないね。そんな者は、アンコ稼業がつとまらないですよね。目のまえで頭が割れて脳味噌がとびだしているのを見ても慢性になつて、どうともありやしないですよね。アンコが海に落ちてブカブカ浮いていると、ほらスイカだぞとはやしてたるんですよね。怪我はしそつちゅうだし、痛いには痛いんだがね。なに、慣れれば労災の一時金がもらえるだけ得をしたと思うんですよね」と語る。こういうアンコの世界に、同情といふ名の退廃的な思想を持ちこんだところで、どういうこともないではないか。

過日、一人のアンコが港湾病院を訪ねた。手首が血だらけである。みれば左の親指が切



しかし疑いをいたいた医師の連絡で労基署が調べてみると、このアンコの親指は以前からなかつたのである。約十万円の保険金をねらつたサギであった。察するに行く先まで親指をすこしずつ切り売りしていたらしい。

血液銀行に売血するアンコも多くいる。仕事があつても、血を売つて生きるアンコたちに、労働災害についての自覚を持たせようという運動が有効ではないのはあたりまえだ。なにしろ職安のまんまで、地べたにすわつて、花札賭博を開帳する勇者たちであるから、左向け左の組織労働者のようなわけにはいかない。「アンコは天国や。アンコ三日やつたらやめられん」という言葉が「アンコは地獄や。人間のゴミタメや」という言葉と同時に吐きだされてくる。果してかれらはこの生活に満足しているのか、脱出したいと願つてゐるのか。

アンコたちの密集する安宿の密集する湊町のある二十円喫茶店で、わたしは二人づれのアンコと話していた。やがて二人は酔ざましのコーヒーフードを邊り戻還すべく立ちあがり金を払わずに出ていった。店のたくましい女の子は、あら、まだ払わんと出て行つてしまふ。

た、といつて後をかたづけ、横目でわたしをきつくらんだ。店主のオヤジが、追つかけで行け、と命令したのだが、例の女の子はいかない。「アンコは天国や。アンコ三日やつたらやめられん」という言葉が「アンコは地獄や。人間のゴミタメや」という言葉とともに吐きだされてくる。果してかれらはこの生活に満足しているのか、脱出したいと願つてゐるのか。

おそらく肩荷役のアンコであろう、あの二人は巨大な胸幅を持ち、拳闘に自信のあるわたしにも容易には打ちたおせない偉大な風貌をしていた。それが二十円の金もなしにコーヒーを飲み、絶望と樂天の振幅の大きさでわたしの思想に衝撃をあたえ、やおら店を出ていったとき、わたしの考へているほんとうのアンコにあつた、と思つた。

人間のセリ市

神戸港だけではなく、どこの港でも、港湾荷役の主たる部分はアンコ的労働者、日雇沖仲仕の労働にまかされている。常備仲仕の数はごくすくなく、労働部門によつてもちがうが二割から三割といどである。危険が多く、汚ない好ましくない作業の大部分は、アンコ

うして予定された仕事を終つすれば元請から金をもらつてアンコと少數の常備仲仕に分配し、そのビンハネによつて維持されているのが、これらの荷役業者の内容である。

これは現代のイソップ物語である。昔の王様は自分の直属の兵隊を一人でも多くほしがつた。今の王様は、虚榮心がない。実質的利益さえあれば兵隊など必要ではない。かくして日雇沖仲仕・アンコ的労働者の延数は全国ですべてに百万ちかく、これに反して常備仲仕は全国で五万人といどしかいない。王様にとつては、これら日雇アンコたちがどのような悲惨な、あるいはでたらめな生活をしていようが関与しない。それはそれでいい。臨時工制度や下請制度や人入れ稼業が、法的には認められている今日の日本において、わたしたちはこの一群の王様たちを批難することは不可能である。

さきの釜ヶ崎の一揆において、暴力手配師の存在があらためて巷間に喧伝された。神戸港においても数年前から暴力手配師の問題はジャーナリズムをにぎわせているが、荷役業者たちは、自分たちみ

がやる。なぜ常備がすくなく日雇が多いか。基本的にには、いまの大経営の労務対策である臨時工制度の港湾的形態である。常備(本工)を行くわけではなく、港の主役であろうと組合であるため、結局いまでは実質的には全港湾が壊滅的状態になつてしまつてゐる。これらの事情は、神戸港の王様たちにとってはまことに申し分のない有難いことであつて天下泰平、ストライキも起らないのである。神戸港の王様たち、つまり海運・倉庫をにぎる三井・三菱・住友などの五大独占資本にとつては、三十円宿のアンコたちや野宿の無宿人たちは縁なき衆生である。その労働において、アンコたちが港の主役であろうと荷役のすべては、王様たちの下請人にしかも、王様たちはあざかり知らぬ。なぜなら港湾荷役のすべては、王様たちの下請人にしかすぎない荷役業者に請負わされているからである。一次下請が二十四社、二次三次になるところはもう三百社をうわまわりその実数さえすからが三十円宿にわもむいてアンコ格いに行くわけではない。えいしょこらしょと半長靴の腰をあげるのは、いざれおとらぬ手配師たちである。ギャングの親玉よろしく眼鏡をかけた色の浅黒い手配師たちは、親方(荷役業者)からあたえられた金をふところにおもむろに港に姿をあらわす。

手配師たちは、アンコを買う、また拾う、という。仲間たちと「さあて、アンコ買いに行こうか」とさいごの酒を飲む手配師たちを見ると、なにか奴隸時代に逆戻りしたような錯覚を感じる。しかし金で買われるアンコたちも、月給いくらのサラリーマンも、結局賃金奴隸にしかすぎないわわれな存在でしかないともいえよう。わたしは、いまのサラリー

ビンハネとゴマカシによって生活している。たとえば二十人のギャングを三万円で親方から請負い、実際には十八人にして二人分のビンハネをし、一人あたま百円でも二百円でもビンハネすれば結構いかず商売ではないか。アソコが多いときは手配師の天国である。市場の法則によつていくらでも買いたたけるわけだ。

ところがここ数年来、港湾もまた人手不足がつづいている。飯場というきめ手のある土木建築産業がどんどん底辺の労働者を吸収している。自衛隊も農漁村の失業者獲得に血眼である。その結果、神戸港に仕事を求めるアンコたちの絶対数は昭和三十年頃からあまり増えていない。それに反して貨物量は急激に増大している。以前は農漁村からのアプローチで多数をしめていたアンコも、いまでは炭坑夫や工員・店員など雑多な階層出身者がふえ、自衛隊や巡査からの転落者も多くいる。

アンコが不足すると、人入れ稼業の弱味でそのまま倒産の危機となる。ここでも激しい鬱金花起り、アンコの奪いあいに血の雨もふ。自衛隊よりは合理的である。

アンコを手配師が引きすりこんだ、それだけで充分である。五分とたないうちに、数名の手配師がどこからともなく出現し、みて止めるに入るように恰好で実はなぐられている



(筆者撮影)

る。アンコたちは、ワンディ（一労働日をこ

う呼ぶ）千円以下では働かないようになり、

それは金で買われるアンコの強味で、今年の六月にはワンディ一千三百円の高値がついた。

わたしはこの目ではつきり見たが、株式とおなじように人間の労働値段が午前中にめまぐらしく変動するのだ。七月の弁天浜の職安で、わたしは原爆ケロイドを持つマグロのよう顔をしたアンコと一緒に、窓口の値段を喰い入るようみつめていた。ケロイドのアンコは目が悪いので、わたしがかれのかわりにいい値段の仕事を探してやる羽目になったのだ。午前七時、本船荷役K運輸、積荷は雜貨、ワンディ九百円とで、「どうだい、行くかい」とわたし。アンコは首を振った。午前八時、おなじ仕事が千円になった。それでもまだうんといわない。こうしてわたしたちは十時すぎまで職安の窓口にへばりついていたが、千二百円になったときやっとアンコは窓口に近よっていったものだ。遅く行つて日当は多額でこんなうまい話はない、とわたしは思った。日本中の労働者が、こんなふうに賃金のせり市をやつたらさだめし労働運動は大きく変革することだろう。

アンコの腕や足を押え、思う存分なくぐりよいにあつらえるのである。たとえ誰かが警察をよんだところで、くたばつたアンコを仓库にほうりこんで扉をとざせば「このへんでケンカがあつたらしいね」などと警官はうろつくばかりである。沖がかりの船内ともなると、リンチはもはや公然たる無法地帯で行われる。昭和三十三年には、とうとう絶命したアンコもでて港神戸の暴力手配師問題は国会の調査団派遣といふ事態にまで発展した。

手配師たちが暴力を振るのはそんなに複雑な理由はない。約束していたのによその手配師に買われて行つた。あるいは、前借金を飲んでそのままどかの隅でねこんでしまい約束の時間に現れなかつた、などという仕事の問題もある。あるいは、アンコがワンディで雇われたから徹夜は嫌だと申立ててリンチされることも多い。日当の不満の盗みを発見されて、たたき殺されたアンコもいる。手配師はギャング編成に必死だからさまざまな形でアンコを

手配師への恐怖

以上の点ばかりをみれば、アンコさまさますやすと發展しないのである。手配師の暴力がここに登場してくる。わたしは神戸の埠頭で、アンコが手配師にたたきのめされ、逃げてはつかまり、息のたえるかと思うまでリンクされる現場をいやというほど実見した。日本をめぐり歩く記者者というわたしの仕事のなかでも、これだけ暴力に接したのは始めてであった。手配師が陸上においてアンコをやっつける型はたいていきまっている。リントするべきアンコを発見した手配師は、かれを他のアンコから引き離す。港はその点庫と倉庫のあいだは絶好のリント場である。

ここに連れこまれたアンコはたんに一人の手配師のリントを受けるのではない。手配師仲間がすぐないときで五人、多いときは十数人もあつまる。手配師の捷である。AというアンコとBという手配師のあいだに、どのような対立があるにしても、ことアンコにたいしてはつまには統一戦線でのむあたり、いまの

握ろうとする。酒を飲ませることもあれば女を抱かせる世話をまでもする。しかしさいこは暴力が物をいうのは今も昔もかわりがない。恐怖をもたれない手配師は一人前でないといわれる。優秀で稼ぎのいい手配師はたいていアダ名があつて、三十円宿にねていても、その名をきくとび起きるアンコがいる。窓にめがけ身がまえ、かくれようとする。港はひろいようでせまい。おとなしい年老いたアンコは、いくら搾取されようと不公平はいわなければ、まだまだ働きざかりのアンコは、五十円でも、百円でも、自分を高く買う者に身をまかす。どんなすさまじい恐怖があつても、自分を高く売りたいという執念はすさまじいものである。そうまでして稼いだ金を酒・女・賭博に一夜で費い果し、あといく日かをしみじみと味つた。四五一一という賭博をカメラにとつたところ、手配師に追いかげられてあやうくどうかされるところであった。わたしはまちがつて職安に逃げ込み、そこは手配師のたまり場ときいてあわてふためいて労働会館に逃げこんだものであつた。

手配師にたいする恐怖は、かれらアンコの生活と密着している。アンコの大部分は、消防署もサジを投げた貧民窟である三十円宿に棲息している。これは手配師にとってはまたない魚礁である。アンコを釣りにくるにせよ、やつつけにくるにせよ、百二十軒ばかりのドヤを目にすればいいのである。わたしが調査中のドヤに手配師の一団がやって来て三十三時間、四十時間というべらぼうな長時間労働で疲れきったアンコたちをたき起し、四五賭博を開帳した。起きなければとばされる。賭けて勝てばインチキしたと半殺しの目にあい、負けていれば機嫌のいい手配師たち。これでは時金もヘチマもありはしない。

手配師たちに対する恐怖はときには憎悪に変化されて、夜陰に乗じて恨みのある手配師をめったうちにする自衛団もあらわれた。しかしわたしのいちばん印象に残ったのは、しいたげられたどん底のアンコたちがとる、ひとつメタモルフォーゼである。薄暗いドヤの一室でわたしは四十歳ばかりのアンコと対話して、わなしあはれに酒をすすめ、自らおしゃか語っていた。さればくどくどう

翻されはじめたのである。大手業者が結束して、零細荷役業者を整理し、手配師たちの職を奪い去った。業者間協定による賃金が職安とおして一方的にあたえられ、アンコたちは否応なくこの低賃金に束縛されることになった。現在、神戸港では、職を失った手配師と、会社直属の求人連絡員となつた元手配師が激しい争いを展開しているが、この勝負は王様の出場を待たなくとも自然にうまく解決するであろう。

業者・職安・警察が三位一体となつたこの美粧が、暴力手配師の追放という課題にこたえられるかどうかは不明だが、アンコたちの賃金が大幅に引下げられたのは事実であつて、おなじ八月一日の釜ヶ崎一揆誘發の大きな原因ともなつたのだ。

競争しあつた業者がこのような革命を遂行できたのは、最高四百口数という巨大な荷役を最高二三〇口以上はうけつけられない王様に嘆願した結果であった。荷役量を制限すれば、アンコを奪い合つて賃金を引上げることもunnecessaryなわけだ。それに業者たちは、漸次、指名アンコと称する半常備のアンコを自己の飯場にかかることに成功した。これ

手配師にたいする恐怖は、かれらアンコの生活と密着している。アンコの大半は、消防署もサジを投げた貧民窟である三十円宿に棲息している。これは手配師にとってはまたない魚礁である。アンコを釣りにくるにせよ、やつつけにくるにせよ、百二十軒ばかりのドヤを目にすればいいのである。わたしが調査中のドヤに手配師の一団がやって来て三十三時間、四十時間というべらぼうな長時間労働で疲れきったアンコたちをたき起し、四五賭博を開帳した。起きなければとばされる。賭けて勝てばインチキしたと半殺しの目にあい、負けていれば機嫌のいい手配師たち。これでは時金もヘチマもありはしない。

手配師たちに対する恐怖はときには憎悪に

自分の受難を訴えていた。手配師にたいする抵抗を語り、その挫折を、恐怖を語った。ふとかれは変貌した。かれはわたしをおどかしはしがれた表情が、すごいある陰惨な表情にうつりかわった。かれはわたしをおどかしはじめ、ここでおめえを殺してもサツにはわからぬしねえ、と殺し文句を並べはじめた。かれの表情や言葉は完全に手配師のものであった。わたしが驚かないでいるとかれはますます手配師になつていった。

古典落語に「らくだ」というはなしがある。ヤクザにおどかされていたクズ屋が、酒を飲むほどに逆にヤクザをおどかしはじめる。という他愛のないはなしだが、手配師という名のヤクザたちにたえず監視されおどかされている被害者であるアンコの一人が、わたしの前で加害者になってみせる一場景は、忘れられなかつた。アンコの性格には、忘れない変貌が多い。だからアンコ同志はなかなか友人をつくらない。みんな一人一人ばらばらでいるあたりホワイトカラーと似ている。ドヤ街で一人づれのアンコによくあつたが、話してみればほんとうはにも連帯しているわけではなく、極度の不信と否定の精神たるが、

しかし残念ながらわたしはこの報告を過去形においてしか書けなくなつた。「八月一日革命」ともいべき変革が荷役業者のなかからおこされ、賃金は八百円平均に統一的に切下げられるとともにアンコはすべて職安を通じて雇用するという建前がこの八月一日から確実に心をいっぱいにしているのがよくわかつた。

暴力手配師失業

日本の各地で、二二〇円一二五〇円というまさに犯罪的指数の最低賃金（業者間協定）がきめられている今日的時点に立てば、アンコたちの日当は労働者の勝ちとつたひとつの勝利である。雇われた以上はと、社長の私宅の庭掃除に余念のない日本型労働者の多いなす手配師になつていった。

ヤクザにおどかされたクズ屋が、酒を飲むほどに逆にヤクザをおどかしはじめる。この表現や言葉は完全に手配師のものであつた。わたしが驚かないでいるとかれはますます手配師になつていった。

古典落語に「らくだ」というはなしがある。ヤクザにおどかされていたクズ屋が、酒を飲むほどに逆にヤクザをおどかしはじめる。という他愛のないはなしだが、手配師とい

はもうれつきとした臨時工である。この指名アンコの確保はなが年の業者の念願であつて、これによつて、荷役態勢をあるといど固定すれば、あとはたえず神戸に流れ込んでくる底辺労働者をアンコとして補充するだけのことたりるわけだ。

神戸港湾職業安定所長にあつたが、所長は「街頭募集をやつて、手配師をつかまえるために業者が監視員をつくる、もう何人もつかまえてわたしのところにつき出してきましたよ」としきりに喜んでいた。そのかわりすべてのアンコが職安の窓口を通すようになつたので職員は過労でのびてゐるといふ。どうやら八日一日革命は着々と成功しつつあるといえる。わたしは、賃下げと、熟練者も新参もわけへだてない一律賃金に不満をもらすアンコの群のなかにいて、二つのことを考へないわけにはいかなかつた。一つはこのままではいれば港湾荷役の停滞は蔓延するばかりで、すでに港内には貨物をかかえたままウロウロしている貨物船が何十隻もあるという現状について、港の王様たち、あの独占資本側が、どう対処するか、ということであり、もうひとつは、ジブシのよだな自由を失い画

（謹 訂）本誌十月号、一一五頁上段三行目の「又は刑罰を科せられない」の誤り、また、アソコが、王様の忠実な兵隊にならないと誰がいえるであろう。問題はなお複雑であり、わたしたちはこれら雇労労働者のゆくえを自分たちの問題として見まもつてゆく必要があるであろう。

（謹 訂）本誌十月号、一一五頁上段三行目の「又は刑罰を科せられない」の誤り、また、アソコが、王様の忠実な兵隊にならないと誰がいえるであろう。問題はなお複雑であり、わたしたちはこれら雇労労働者のゆくえを自分たちの問題として見まもつてゆく必要がある

日本の潮

★ 池田内閣と臨時国会 一四
★ 災害復旧を返上した村 一六
★ 金院長の訪日と日韓交渉 二〇
★ 國際收支と倍増計画の破綻 二八
★ ソ連見本市のうらおもて 二九
試練のなかの平和運動 煙中政春 三一
休場に働く森秀人 三〇

前森山集団農場の歩み 謹 訪 弘

（グラビア）七年目の開拓村 川島 浩

ロビンソンの国 村松剛

休日の憂鬱 安岡章太郎

—私のアメリカ紀行—

ヴァイキングの末裔 荒正人

アンシャタイン最後の年 マッセルとの往復書簡

かれの心を占めていたものは平和にたいする科学者の責任であった

（グラビア）美術館を訪ねて 名取洋之助
花の都 フィレンツェ 三輪福松

エジプトの珍魚 末広恭雄

歴史とは何か(1)歴史家と事実

現代という時代の新しさを認めるることは、おのずから過去を見る眼の新しさを要求する

E·H·カーラー

（漫画）不気味なもの 那須良輔

読者の貢核実験反対運動によせて 鈴木あつ子

映画隨想

戦争と革命の間 埼谷雄高

〔史伝〕西郷隆盛 海音寺潮五郎

白い塔 判 堀田善衛

創作 白審

世界

特集 核戦争の暗雲と日本

第 191 号
昭 和 36 年 11 月

残された唯ひとつ可能性 南原 繁
権力政治と平和運動 坂本義和

〈座談会〉 核実験再開と全面軍縮

朝永振一郎 田中慎次郎 福田歎一
〈図説〉 危機の焦点と核競争
国民運動と組織 日高六郎
平和の思想と平和の実践 久荒野瀬
收録

〈資料〉 危機の激化と非同盟主義
ハマーショルドの死と国連 宮地健次郎

〔現地〕アデナウアー時代終るか 田中・笹本
休日の憂鬱 安岡章太郎
歴史とは何か(1) -歴史家と事実- E.H.カーリー
清水幾太郎訳

アインシュタイン最後の年 -ラッセルとの往復書簡-

11

岩 波 書 店